HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本農村社会学原理
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	研究論文集 : 研究論文抄録誌, 1, 77-81
Issue Date	1950
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78356
Type	journal article
File Information	C014_0111950.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

文學・哲學・史學學會連合編集

研究論文集

第一卷

研究論文抄錄誌 (1)

THE JAPAN SCIENCE REVIEW

LITERATURE, PHILOSOPHY AND HISTORY

VOL. I.

***Abstracts of Doctoral Dissertations* (*I*)**

Union of Japanese Societies of
Literature, Philosophy and History
1950

目　　次

文　學　部　門

ジョン・ダンの修辭的映像に現れたる彼の世界觀及び將來の英帝國に
對して彼の抱きたる幻想 …… 松浦嘉一 … 1
アルカディア方言の研究 …… 高津春繁 … 7
平安時代文學と白氏文集 …… 金子彦二郎 … 12
支那現代文學の研究 …… 辛島驍 … 18
ディケンズの英語の生長と體系 …… 山本忠雄 … 23
方言語彙學的研究 …… 小林好日 … 29
東洋文庫本華夷譯語「百夷館雜字」並に「來文」の解讀研究……
…… 泉井久之助 … 33
文體論 …… 小林英夫 … 39
セム・アルファベットの起源及發達 …… 小辻節三 … 44
モンテーニュとパスカルとの基督教辯證論 …… 前田陽一 … 51
元雜劇研究 …… 吉川幸次郎 … 57
能樂源流考 …… 能勢朝次 … 61
蕪村の傳記の研究 …… 顯原退藏 … 66

哲　學　部　門

明治初期教育思想の研究 …… 稻富榮次郎 … 71
日本農村社會學原理 …… 鈴木榮太郎 … 77
加茂眞淵の宗教史的考察 …… ハインリッヒ・デュモリン … 82
オリゲネス研究 …… 有賀鐵太郎 … 86
蓮如上人と安藝蓮宗 …… 伊藤義賢 … 92
藝術の創造と歷史 …… 井島勉 … 98
天道と人道——二宮尊德の哲學—— …… 下程勇吉 …103
宗教神秘主義の研究 …… 岸本英夫 …108
イエス時代のユダヤ教研究——パタンジャリ—— …… 大畠清 …114
大乘菩薩道の史的研究 …… 山田龍城 …118

東洋的無の性格 …… 久松眞一…124
文化社會學 …… 藏内數太…129

史學部門

鏡鑑を主材として考察したる六朝以前の文化 …… 駒井和愛…135
莊園の研究 …… 中村直勝…140
建武中興を契機とせる政治社會情勢の推移についての考察 ……
…… 魚澄惣五郎…143
日支交通の研究（近世篇） …… 藤田元春…146
中世日支通交貿易史の研究 …… 小葉田淳…151
東廻海運と西廻海運の研究 …… 古田良一…157
新羅花郎の研究 …… 三品彰英…163
宮座の研究 …… 肥後和男…168
五代宋初の通貨 …… 宮崎市定…174
宋代財政史 …… 曾我部靜雄…180
フシーテン運動の研究 …… 山中謙二…185
遼代社會經濟史に關する研究 …… 田村實造…191
高麗續藏彫造攷 …… 大屋德城…197
清初八旗制度考 …… 鴛淵一…203
阿倍仲麻呂傳研究——朝衡傳考—— …… 杉本直次郎…209

追　記　本卷に集錄すべき論文のうちに、調査の粗漏から尾高邦雄氏の「職業社會學」を洩らしましたことを深くお詫申し上げます。ついて同氏の論文抄錄は、次年度（第二號）に收めますから左樣ご承知おき下さいますよう、各位のご諒恕を願上げます。　（編集部）

Contents of English Abstracts

Literary Division

Donne's Imagery: a Revelation of his Outlook on the World and his Vision of the Future British Empire ……*Kaichi Matsuura*…215
A Study of the Arcadian Dialect ……*Harushige Kōdzu*…217
Japanese Literature in the Heian Period (894-1184) and the Hakushi Monjū (白氏文集) (The Poetical Works of Pai Letien (白樂天 772-846): Studies on the Literary Works of Michizane (道眞) ……*Hikojirō Kaneko*…219
Studies in Present-day Chinese Literature ……*Takeshi Karashima*…221
Growth and System of the Language of Dickens……*Tadao Yamamoto*…222
Scientific Study of Dialectal Words ……*Yoshiharu Kobayashi*…224
The Decipherment of the Po-i (百夷) Vocabulary and Epistles……*Hisanosuke Izui*…225
On Stylistics……*Hideo Kobayashi*…226
The Origin and Evolution of the Semitic Alphabets ……*Abram Setsuzō Kotsuji*…227
The Christian Apologetics of Montaigne and of Pascal …*Yōichi Maeda*…229
Plays of the Yüan Dynasty……*Kōjirō Yoshikawa*…231
A Study of the Origin of Nōgaku……*Asaji Nose*…233
A Biography of Buson ……*Taizō Ehara*…235

Philosophical Division

Educational Ideas in the Early Meiji Era ……*Eijirō Inatomi*…237
Principles of Rural Sociology in Japan ……*Eitarō Suzuki*…239
Kamo Mabuchi—A Contribution to the History of Japanese Religion ……*Heinrich Dumoulin*…241
An Existential Study of Origen ……*Tetsutarō Ariga*…243
Rennyo Shōnin (His Holiness) and Rensō Aki……*Giken Itō*…245
The Creation and History of Art ……*Tsutomu Ijima*…247

日本農村社會學原理*

鈴木榮太郎**

社會學上の一研究として、現時の日本農村社會生活の中に存する社會構造を明らかにする事が、本論文の主旨である。結果に於いて家族と村落が、論述の二つの中心點をなして居る。日本農村の社會生活の足場が、此二つの集團に主として集中して居る、卽ち、日本農村社會生活に於いて、家族と村落が最も重要な社會的構成物であるからである。

本研究に於いて著者は、日本各地の農村を自ら踏査し、そこで見出した生(ナマ)の事實の觀察の上に社會學的理論を構築して行つた。研究資料の大部分は、著者自らが現地で得たものではあるけれども、歷史家や民俗學者や經濟學者等の研究業績も亦利用されて居る。研究の方法に關しては、米國農村社會學や英國ルプレー派社會學に學ぶところは多かつたが、日本的社會事實の特性の爲に、獨自の方針を進めることも必要であつた。

日本農村社會生活は、大要次の樣な構造を持つて居ると云ふ事が出來る。日本農村界に於ける人々の社會生活を、その地域の上に投影された形について考へて見ると、社會關係の中最も客觀性の顯著な團體や、比較的固定して定型化して居る社會關係は、一定の地域の上に重積して居る。かくの如き集團重積體は何れの地域に於いても三重又は四重になつて居る。最も多くは三重の組織である。この重積體の地域をその小なるものより順次に、私は第一社會地區第二社會地區第三社會地區と名づけて居るが、第三社會地區には、第二社會地區の七乃至十を含み、第二社會地區には第一社會地區の三乃至五を含んで居る。第一社會地區は、やはり集團重積體としての家族の十五乃至三十を含むものである。此等の數字は若干のモノグラフ的調査の結果の平均的規模に於けるものであつて、注釋を要するものである。第三社會地區を若干含む地域にも、矢張り集團重積の輪廓を見出す事は出來るが、余り重要なものではない。それは種々の社會圈と云ふ可きものの重積である。

---

* 本論文は東京大學に提出された。

**略歷。一八九四年生。東京帝國大學文學部にて倫理學專攻。岐阜高等農林學校教授、京城帝國大學教授を經て、現在北海道大學教授。本論文は一九四〇年に時潮社より刊行。關連ある著書に「農村社會學史」「農村社會調査法」「朝鮮農村社會踏査記」等がある。

右の三種の社會地區の各々の上に、社會集團が重積する場合の樣式は、一樣ではない。一つの集團を一つの圓周で表はすなら、同一中心の同一半徑の圓周が重つて居る場合もあり、中心や半徑が異なり部分的に重なつて一定の地域より超出しない場合もある。

現時の日本農村に存する社會集團の種類は、地方により多少の相異は見られるが、主要なるものは大體に一樣である。一見多種多樣であるが、次の十種目に分類する事が出來る。(一) 行政的地域集團、(二) 氏子集團、(三) 檀徒集團、(四) 講中集團、(五) 近隣集團、(六) 經濟的集團、(七) 官設的集團、(八) 血緣的集團、(九)特殊共同利害集團、(十) 階級的集團。これ等の集團の中には、甚だ古くより、しかもその村落の發生と共に生じたと思はれる集團もあれば、甚だ新らしく發生したもの、現に發生しつつあるものもある。個人個人の意志によつて次ぎ次ぎに新らしく形成されて行く集團もあれば、個々の村人は出生と共に不任意にその集團員となつてゐるものもある。古くは不任意加入の集團が多く任意加入の集團は甚だ少かつたが、明治以後此逆の關係になりつつある。

農村に見られる樣々の集團の中、神社信仰の團體即ち一つの神社を中心とした其氏子の團體の圈は、村落の圈と一致する場合が極めて多い。一つの村落は、そこに氏神が完備する事によつて完成されるとさへ考へられる場合もある。二つの聚落社會が、一個の氏神に屬するなら、そこには村落は一個あるだけであると考へられ、又逆に一つの聚落社會が、二つの氏子團體に分れて居るなら、村落はそこには二つあると認む可き場合が多い。かくて日本の村落と氏神とは、表裏の關係がある樣に思はれるが、然し氏子團體も村落に重積する諸團體の內の一つであつて、村落をして村落たらしむるものは外にある。

先の三種の社會地區の中、第二社會地區は質的に他の二つの地區と異つてゐる。私が自然村と呼んで居るところの、日本農村に於ける地域的社會化の單位となつて居る聚落社會は、此第二社會地區の上に存する社會的統一である。此第二社會地區の上に存する社會的統一は單に集團が重積して居る統一ばかりではない。此第二社會地區の上には、多數の同一半徑と同一中心の集團や、部分的に重なつた多くの集團が重積して、一つの全體を構成して居るが、それだけではない。此地區の人々は、生活のあらゆる方面を規定して居る體系的な生活原理を含むところの同一社會意識內容によつて、相互に監視し合ひ强く拘束し合つて居る人々である。この一團の人々は同一の歷史的體驗を持ち、個性的な意味共同の世界を形成して居る。即ち彼等のみに共通な意味や價値がある。此共同の關係は彼等の一團より大きくもなく小さくもない範域に及んで居る。故に其社會意識は、彼等のみに經驗される個性的なものでもある。かくの如く、生活の全方面に及ぶ社會意識活動の自足自給的存在として、第二社會地區の社會的統一は、他の地區の社會的統一と質的に異つて居る。一般に村落と名づけられる社會構造物は、從來集團重積體として又樣々の種類の共同關係の重積體として、理解されたのであるけれども、全生活に及ぶ同一の個性的な體系的

生活原理を含むところの社會意識內容による相互制約者の一團と見る事によつて、村落は少くとも日本に於いては、最も明確に、其社會的特性を明らかにする事が出來る。かくの如き見解の根據として、株入、氏子入、村入、村仕事、共同新願、村ハチブ等の慣行制度及び村內生活に於ける毀譽褒貶の事實等に關する、周到なる觀察の結果をあげる事が出來る。

然し社會意識內容の體系的整備及び社會意識作用の拘束力の强靱さは、明治以後著しく變化しつつある。其社會意識の內容の及ぶ方面が漸次狹くなつて來た事、其體系的構造が漸次崩れて來た事及び其拘束力が次第に弱くなつて來た事は、次第に著しくなつて來たとは思はれるが、日本及び東洋の多くの村落は、今尙ほ著しくかくの如き社會意識自足自給體としての性格を顯著に有して居ると思はれる。かくの如き村落では、社會意識による强靱な相互拘束の爲に、同一村落の人々は全く一樣の行動形式に從ふ結果となるから、個人等の個性が充分に成育し得ないと共に、そこには文化の發展が停止して居る。傳統や過去が支配し、理想や將來が萎縮して居る生活となる。

同一社會意識內容による相互拘束作用は、相互面識者の圈を豫想して居る。又生活經驗の一樣なる事、その爲には來住往住等による住民の移動が少くその異質性が多くない事、かくて色々の社會的分化が少ない事等が豫想される。即ち住民の社會關係が、地域的、永續的、全人格的、集團的なる事が必要な條件となる。然し此等の條件は明治以後著しく毀損されて來た。かくて生活經驗の一樣性が、漸次破壞され、其爲社會意識內容が混亂し、其拘束力も減じて來た。それに自由人權の思想は、直接に社會意識の拘束力を弱めて來た。

日本の農村社會構造が、アメリカの大部分の地方に於けるが如き、ラーバン・コミュニティーを根幹とする構造に近づきつつあるとは云ふ事が出來る。日本の農村が、此傾向に進む爲には、第一に、村落內部の强い結束を解體する事が必要である。地形及び農耕技術の爲に聚落が今の樣に集村型をつづけるであらう事は考へられるが、村內の社會結合は明らかに弱くなりつつある。第二に、農村に於ける中心となる市街地への依存の關係の增大が必要である。村落の自足自給的生活は經濟的にも文化的にも政治的にも益々不可能となり、附近の市街地が次第に增大しつつある事は事實である。

かくて日本に於ける村落社會の型の分類は歷史的地方的個性に基づくものよりも、都市化の程度による分類が、より根本的な分類となる。かくの如き分類として講中村、組合村、農場村の三つの類型を示す事が出來る。

村落の細胞をなす家族も、亦日本に於いては同樣の特性を持つて居る。日本人の營む家族生活は家と名づくる特殊の性格をもつた社會的構成物を形成して居る。家族も其機能に應じて樣々の集團に分解して考へる事が出來るから、家族もかくの如き集團の重積的統一として考へる事が出來る。日本人の家族に重積して居るかくの如き集團は、其數極めて多

く、生活の全部面に及んで居ると云ふ事が出來る。然し家と名づけられる日本家族の特性は其時間的發展の樣相に存して居る。卽ち家は家長の世代を重ねつつ無限に存續し其時間的同一性を保持するものとの豫想を生活活動の基礎に置いて居るところに、家の最も著しい特性がある。

かくの如き家には、其村落の社會意識の規定と矛盾しない範圍に於いての、個性的な行動原理が存して居る。其相互制約の關係は村落の場合と同樣である。かくの如き、其家獨自の生活原理を社會意識內容として、家族員は相互に監視し拘束する生活をつづけて來た。かくの如き家の社會意識は、個人の自由と發展を無視した家の尊嚴と發展の爲と云ふ理念を伴ひ、家長と男性の君臨する世界を守つて來た。此家の制度もヨーロッパ的文化の浸透と共に漸次脆弱化しつつある。

日本の農民は永い封建治下に、家の生活原理と村の生活原理の强力な支配下に生活して來たものである。そこには個人の意志は極度に壓縮されて居た。明治以後漸次此二つの壓力は弱りつつはあるけれども今尙ほ牢固として拔けがたきものがある。日本農村生活は上に述べたが如き村落と家族の社會構造と社會意識を理解する事によつてのみ正しく理解され得るであらう。

日本農村住民は、家族と村落の二つの强固な枠の中に產み落され成長して來たが爲に、個人の自由を極度に弱めて居た。それ故に家族及び村落の傳統的行動原理が支配的であつたといふ事は、過去における日本農村の社會事象を、個人の心理的所產としてのみ解釋せんとする見解の不適當なる事を意味して居る。そこでは傳統的行動原理を表現して居る樣樣の傳統的制度慣習の正確な理解が、特に必要である。本論に於ける立論が、かくの如き制度慣行の現地調査報告に基礎を置くところの多いのは其の爲である。

日本の農村に於ける個人の社會的行動は、その所屬する家族によつて、又其家族は、其所屬する村落によつて支配され、而して現在の家族や村落の活動は、著しく過去からの傳統によつて支配されて居る。家族も村落も、永い時間的發展の上に置いてそれを眺める事によつてのみ、日本の現在の家族や村落は正しく理解される。過去が著しく現在を支配して居る日本の家族や村落に於いては、其社會構造も、時間的厚みを持つものとして考察されなければならぬ。歷史的進行に於ける、現時の橫斷面に於いてのみ觀察さるべきではない。本論中に日本の家族を三つの型に分類したのは、家と云ふ家族集團の累代的に存續し發展する時間的存續の樣式に於ける型の分類であるが、これこそ日本家族の生活樣式を原本的に區別づけて居る家族の分類である。その三つの型とは、同族家族と直系家族と夫婦家族とである。

同族家族とは原則として其家族內に生れる者は、婚姻によつて出て行かないもので、婚姻は異なる二つの家族に屬する男女によつて行はれ、生れた兒は母の家族內に止まる。故

に此家族は無限に擴大して行く性質のものである。直系家族とは代々長男が家長としてその家族團を繼續して女兒及び二男以下の男兒は皆婚姻によつて出て行く形の家族型で、日本人の最も一般的な家族型である。日本人の平均壽命や、結婚年齡產兒數等の平均によつて算出して見ると、直系家族の家族構成は二十五年を一周期として、原則的には無限に反覆するものであると云ふ事が分る。夫婦家族とは、夫婦の結婚と共に始まり、其死亡其他による婚姻の解消と共になくなり、世代的に連續しない型の家族である。前の二つの家族型は原則として無限に存續する型であり、此夫婦家族のみは一代にして滅びる家族である。前二つの型では親子の關係が主であり、後の一つの型では夫婦の關係が主である。此最後の型は日本農村には未だ殆んど現はれて居ないが、此型に向つて變化しつつある傾向は、明らかに認められる。これも集團の壓力より解放された個人の自由を尊長する傾向の現はれである。

本稿の冒頭に述べた樣に、本論は現時の日本農村に於ける社會構造を明らかにする事が主旨であるが、それは歷史的發展に於ける現時の瞬時的橫斷面に於ける社會構造ではなく、時間的厚みを相當に持つた橫斷面に於ける社會構造である。個人等が作り出す社會よりも、個人等を作り出す社會が壓倒的であつた、過去の日本の、特に農村の社會生活の分析には、さうする事が必要であるからである。